

# 多高通信

令和三年度防災教育特集号

令和4年3月31日発行  
宮城県多賀城高等学校  
宮城県多賀城市笠神2丁目17番1号  
TEL:022-366-1225 FAX:022-366-1226  
https://tagajo-hs.myswan.ed.jp/



## 内閣総理大臣より「防災功労者」表彰を受賞しました（令和三年九月）

過日、本校は内閣総理大臣より「令和三年度防災功労者内閣総理大臣表彰」を受賞しました。これは「日頃から防災思想の普及または防災体制の整備に尽力し、あるいは災害時における防災活動に顕著な功績のあった個人または団体」に贈られるものです。平成二四年から一〇年間継続してきた津波標識設置活動、県外・海外からの来校者に対して生徒が行う被災地域の「まち歩き」の活動、そして災害科学科の設置など、本校が創意工夫をこらしてきた防災教育が高く評価されました。

この表彰を受けて、本校災害科学科三年・江戸葵さん、秋澤綾香さん、生徒会長・菊池せせらさん



伊東教育長と共に記念撮影（宮城県教育委員会）



災害科学科一・二年生一〇名が、令和三年八月一〇日に東日本旅客鉄道株式会社（JR東日本）宮城野運輸区の協力により、電車に乗っている時に地震・津波警報が発令された場合の避難方法について、先輩たちから受け継いできたさまざまな活動が高く評価されたことへの喜びに加え、これからの抱負や決意表明を述べました。

まず、JR東日本の安全対策を職員の方から紹介いただき、本校災害科学科の取組を発表しました。それらの取組をもとに、高校生から率直な質問をさせていただきました。JR東日本宮城野運輸区には本校の最寄り駅である下馬駅があり、通学等で日常的に利用させていただいている生徒も多くいたため、最初は緊張した様子だった生徒たちも次第に防災や減災の視点からの質問も出るようになり、休憩時間にも各自で職

員の方と意見交換を行いました。次に、地震・津波警報が発令されたときを想定した電車からの避難訓練にも参加させていただきました。組み立て式の階段を利用した降車だけでなく、電車から線路に飛び降りる避難方法も教えていただきました。生徒から「電車から線路までは思っていた以上に高さがあった。しかし、きちんとした降り方をすれば恐怖感はなく降りることができた」などの意見が出されました。また、「地震・津波からの避難では電車の運転手と車掌の二名で多くの乗客を避難させるため、率先避難者と呼ばれる一般の乗客の協力が必要で、そういった避難を率先して実行できるように避難方法を考えていくことに加

JR東日本仙台支社宮城野運輸区主催の意見交換会に参加（令和三年八月）

え、自分の住む地域の避難場所はどのくらいかといった地域の理解が必要だと感じました。」といった意見もあがりました。最後に、シミュレーターを利用した運転体験・車掌体験をさせていただきました。感謝申し上げます。

この場を借りて、貴重な機会をいただいたJR東日本宮城野運輸区の関様をはじめ、高校生の素朴な質問にも丁寧にあたたかく答えてくださった職員の皆様にも感謝申し上げます。

日頃なかなか考える機会がない、電車に乗っているときの津波避難の方法を様々な経験を通して幅広い視点から考える貴重な機会になりました。この意見交換会で感じた課題や災害を学ぶ高校生ならではの気づきを課題研究でさらに深め、次回の意見交換会で提



# 栗駒・気仙沼巡検 (災害科学科二年)



災害科学科二年生がSSHスキルアップ研修Ⅱ「栗駒・気仙沼巡検」として、岩手宮内陸地震の被災地である栗原市・一関市に加え、気仙沼市・南三陸町で東日本大震災に対する理解を深めました。

初日は東北大学の高嶋礼詩教授を講師に迎え、岩手宮内陸地震を扱いました。栗原市ジオパークビジターセンターを訪ね、ジオガイドさんの案内によって荒砥沢ダムや崩落地を訪れ、発生から十三年を経た岩手宮内陸地

震を学びました。午後に訪れた祭時震災遺構では、地震によって大きく破壊された橋を目の当たりにし、地すべり災害がどのような背景によって引き起こされたのか、現地で高嶋先生から解説いただいた後、夜は仙台近辺の歴史を振り返り、どのような過程を経て岩手宮内陸地震に至ったのか、そして過去のカルデラ噴火による火砕流堆積物が広範囲で滑ったことに起因することを学びました。

二日目は気仙沼市に移動



し、気仙沼市復興祈念公園から内湾地区の位置関係を把握した後、リアス・アーク美術館に移動。館内見学後、山内宏泰館長との意見交換会を行いました。自身が抱いた疑問・考えをアウトプットし、館長との議論は予定の時間を超えるほどでした。昼食後、内湾地区を散策。この土地の文化や産業に触れる時間としました。

午後は気仙沼市東日本大震災津波伝承館へ移動し、芳賀一郎先生からの講話の後、気仙沼向洋高等学校の「向洋語り部クラブ」の皆さんに館内を語り部として案内してい

ただきました。本校も「まち歩き」を実施していますが、震災を語り継ぐ活動に取り組む同年代がここにもいることに、背中を押された様子でした。

夕食後は気仙沼市まち・ひと・しごと交流プラザ (pia) を会場に、気仙沼市大浦地区での防災活動に取り組む吉田千春さんを講師に招き、災害時の人権がいかに大切かを考える場を持ちました。少子高齢化が進む地域で実践してきた防災活動とは、どのような配慮があつて可能になつていったのか、吉田さんの取り組みを知るとともに、車座となつて議論し互いの考えを共有する活動を通して、今後高齢化が進む地域で防災減災を考えるにはどのような視点が必要かを学びました。

三日目は朝食前に希望者を対象として、魚市場見学を行いました。早朝にもかかわらず十四人の生徒が参加し、講師の阿部正人先生の案内のもと、早朝から鯉の水揚げの様子を見学しました。水産業の片鱗を垣間見るとともに、この地域がいかに漁業とともに栄えてきたかを肌で感じる事ができました。

朝食後は大谷海岸・小泉海岸二つの防潮堤に実際に立ち、地域住民との合意

形成の末に砂浜を残すことに成功した大谷海岸防潮堤、後背地がそのままとなっている小泉海岸防潮堤の様子を対比し、復興とはその地域に人が住まうことが前提であり、その議論にいか地域住民が参画できるかの重要性を考えました。

南三陸町語り部であるホテル観洋・伊藤 俊さんの案内により、南三陸町震災遺構高野会館、南三陸町防災庁舎跡を巡りました。特に高野会館は実際に内部へ入つて細部も見学し、現在ではなかなか見ることが難しい「全く手の加えられていない十年前そのままの遺構」に圧倒されるばかりでした。

午後はホテル観洋での昼食後、ホテル内ホールで振り返りのワークショップを展開しました。阿部先生のファシリテーションのもと、これまでの行程を振り返り「これからどんな課題意識を持って取り組んでいくかを考える」をテーマに、ペアトーク・OST (オープンスペーステクノロジー) を通して、自らの学びの振り返りと今後への決意を共有しました。

二泊三日という長丁場でしたが、二つの災害を科学的・社会的視点に捉え、災害そのものへの視点は単一なものではないことを改めて学ぶ場となりました。今後の災害科学科諸君の飛躍に今回の巡検が強き足がかりとなつて、防災・減災・伝災を学んだ者として未来を担う有為な人材になつてほしいと願っています。

ぼうさいこくたい2021に参加 (令和3年11月・岩手県釜石市)

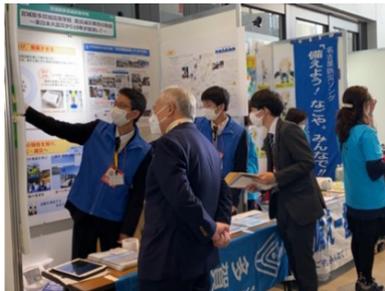
昨年中止となりましたが、例年ですと二泊二日の日程で県内外の防災・減災に取り組む学校を招待し、災害科学科生のファシリテーションで進行する多賀城市民会館でのワークショップ、ポスターセッションや被災地案内などを通して交流する行事です。

新型コロナウィルスの感染拡大に伴い、本校では災害科学科一・二年生がRgホールから参加し、こちらの基調講話をZoomで配信するハイブリッド形式で開催しました。午前は本校災害科学科一年の恒例行事・浦戸巡検でお世話になる浦戸諸島・桂島在住の内海春雄様をお招きし、震災当時の桂島での避難所運営に関する貴重なお話をいただきました。

午後からはZoomのプレイ

クアウトルーム機能を活用したオンラインポスターセッション、グループディスカッションを行いました。災害科学科一・二年生各自が自己所有の端末とヘッドセットマイクを活用し、ブレイクアウトルーム内のポスター発表や他校の発表を自由に行き来して聴講し、グループディスカッションはGoogle JamBoardを活用して議論をWeb上のホワイトボードにまとめるなど、最新のICTツールを全員が臆することなく使いこなす様子は、災害科学科生が確かな情報活用能力を獲得・駆使していることを確信するほどでした。災害科学科生の司会進行、Web上のミーティングをまとめ上げていくファシリテーション力など、災害科学科生の成長を感じる場面が数多く見られました。最後は東北学院大学・和田正春先生から講評をいただき、「伝えるけども伝わらない事実がある。これをどう乗り越えるか」という問いかけに、伝承の難しさやこれからの世代がどうあるべきか、皆が真剣に受け止めていた様子でした。

## ぼうさいこくたい2021に参加 (令和3年11月・岩手県釜石市)



令和三年二月六日(土) (七日(日)) ぼうさいこくたい2021に災害科学科二年生四名が出席してきました。全国から非常に精力的かつ先進的に防災・減災・復興に取り組んでいる研究機関や官公庁省、NPOをはじめとした諸団体や企業が集まり、それぞれの活動を報告し、学ぶことのできる場です。その中に、多賀城高校が唯一の高校生として本校の取組を発表してきました。研究者や企業を中心とする方々に加え、多くの一般の方にも本校の取組を聞いていただき、高校生だからこそできること・伝えられることを生徒たちが精一杯伝え、対話を通して深く考える機会となりました。

## 東日本大震災メモリアルday2021 (令和4年1月)

二日目には本校の体操服を製作する株式会社明石スクールユニフォームカンパニー主催のセッション『こどもが夢中になる防災教育』が主体的・対話的深い学びの具体的展開『に生徒二名が登壇し、これまでの学びや災害科学科に入った理由などを説明し、前林清和教授(神戸学院大学)や諏訪清二先生(防災教育学会会長)、榎原隆様(上記会社第二販売部長)とともに防災教育を実際に受けている立場から対話を行いました。多くの人が聴く中でも、堂々と自分たちの考えを伝え、ディスカッションを行うことができました。

